

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531313

研究課題名(和文) 家族参加型の障害児保育ニーズアセスメントの開発と適用

研究課題名(英文) Development and application of assessment based on the needs for caring disabled children, which their families can take part.

研究代表者

飯村 敦子 (IIMURA, ATSUKO)

鎌倉女子大学・児童学部・教授

研究者番号：70326982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、乳幼児の身体意識能力が関与する運動スキル発達分析を通して、障害児保育に活用できるアセスメントを開発した。さらに、障害乳幼児とその家族へのムーブメント教育による支援を通して、育児力を高める家族支援のあり方を検討した。

ムーブメント教育・療法プログラムアセスメント(MEPA-R)の身体意識能力に関わる111項目について968名の乳幼児のデータを分析し、その項目が達成できる月齢期間を明らかにした。そして、障害児保育に活用できるアセスメントシートを開発した。また、ムーブメント教育による障害児への支援プログラムの実践を通して、育児力を高める支援の有効性を検証した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the creation process of infants' body awareness and developed an assessment to be used to care disabled children. Furthermore, how to support the improvement of childcare ability was examined through the support on disabled infants and their families by movement education. An analysis was conducted on 968 infants' data on 111 items regarding their body awareness. For 111 items, at how many months old the infants become able to accomplish certain tasks was clarified. Then, they were compiled as an assessment sheet to be applied for caring disabled children.

In addition, support was provided to disabled infants through movement education. Actual programs of movement education that can be used for childcare were clarified. Also, interviews with mothers indicated that the support through movement education improves childcare ability.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：障害児保育 アセスメント ムーブメント教育・療法 家族参加

1. 研究開始当初の背景

特別支援教育が学校教育法に位置づけられ、すべての学校で障害のある幼児児童生徒の支援の充実が図られることになった。また、文部科学省による特別支援教育の推進について(通知)では、「特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍するすべての学校において実施されるものである」とことが明示された。

ところで、特別支援教育実施に先駆けて行われた「小学校、中学校、高等学校等におけるLD、ADHD、高機能自閉症等のある幼児児童生徒への教育体制状況調査」(文部科学省、平成18年)において、幼稚園・高等学校の実態が明らかにされた。この調査の結果、幼稚園・高等学校における特別支援教育は、小・中学校と比較して全体的にその体制整備が遅れていること、地域による取り組みの差が大きいことが明らかにされ、さらなる体制整備の重要性が提言された。

これまで、幼児教育における障害のある子どもへの支援は、障害児保育と位置づけられ、障害の早期発見、早期教育の重要性については、医療・教育・福祉等、様々な側面から検討されてきた。幼稚園、保育所に在籍する支援を必要とする子どもは、生活行動面でのスキル、集団教育で求められる社会的スキル等において、多くの困難やニーズを抱えている。しかし、障害の確定診断を受けているケースはごく一部であり、現場では発達障害を危惧しつつも、支援を要とする子どもの発達のニーズに基づく十分な支援が保障されているとはいえない。現在、幼稚園や保育所において、子どもの支援に直接携わる保育者が活用できる現場に直結したアセスメントや支援法が求められている。すなわち、障害の有無にかかわらず、遊びを通して子どもが環境と相互に関わり合いながら、発達を助長する支援法を具体的に提示する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼稚園・保育所における障害児保育、そして、その対応が急務とされる広汎性発達障害や注意欠陥多動性障害等、発達障害やその疑いのある子どもの教育的支援に直結するアセスメントの開発とプログラムの作成、育児力を高める家族参加型支援について検討することである。

具体的には、子どもの動的遊びと環境との相互作用に着目して、運動・認知・社会性等、子どもの全面的な発達を支援する障害児保育ニーズアセスメントを開発し、それを活用したムーブメント教育による支援プログラムの実践と家族参加型支援の有効性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)アセスメントの開発

アセスメントの開発は、ムーブメント教育・療法プログラムアセスメント(Movement Education and Therapy Program Assessment-Revised; MEPA-R)(小林,2005)の運動・感覚分野、言語分野、社会性分野にわたる全評定項目のうち、身体意識能力に関連する項目についての発達の検討を行った。

分析の対象は、S保育園に在籍した0歳5ヶ月から6歳0ヶ月の乳幼児、延べ968名のMEPA-Rによるアセスメントの評定データである。表1は分析対象とした児童の月齢別人数である。

表1: 対象児の月齢別人数

月齢範囲	男児	女児	計
5ヶ月～12ヶ月	49	44	93
13ヶ月～18ヶ月	38	28	66
19ヶ月～24ヶ月	52	41	93
24ヶ月～30ヶ月	54	38	92
31ヶ月～36ヶ月	48	27	75
37ヶ月～42ヶ月	55	37	92
43ヶ月～48ヶ月	66	45	111
49ヶ月～54ヶ月	61	35	96
55ヶ月～60ヶ月	57	37	94
61ヶ月～66ヶ月	56	37	93
67ヶ月～72ヶ月	40	23	63
総計	576	392	968

分析は、MEPA-Rの評定項目180項目(運動・感覚分野90項目、言語分野60項目、社会性分野30項目)のうち、身体意識能力に関連する111項目(感覚・運動分野の56項目、言語・社会性分野の55項目)について、2ヶ月ごとに(+)と評定された対象児の人数から項目ごとの通過率を明らかにした。

(2)障害乳幼児を対象としたムーブメント教育による発達支援の実践

福井県、石川県、兵庫県にある17の保育所がネットワークを組み、ムーブメント教育による障害乳幼児とその家族への療育支援を展開している教室を研究フィールドとして、障害乳幼児の発達を促す動的活動における環境の重要性、ならびにムーブメント教育による支援の有効性を明らかにした。

この教室は、毎月1回、福井市内の公共施設を会場として開催されている。スタッフは、ネットワーク園の保育士42名で、運動面で未発達な子どものグループ(Aグループ)と言語・社会性面で未発達な子どものグループ(Bグループ)での支援を展開した。

参加者は、0歳から5歳の障害のある乳幼児とその家族である。対象児の障害種別は、脳性麻痺、知的障害、ダウン症、自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害、脳梁欠損症等であった。

教室は、フリームーブメントが約1時間、課題ムーブメントが約1時間、水分補給などの休憩が約30分、グループカウンセリング

(振り返り)が約30分で構成されている。

4. 研究成果

(1)障害児保育に活かすアセスメント

身体意識能力に関連する111項目(感覚・運動分野の56項目、言語・社会性分野の55項目)について、2ヶ月ごとに(+)と評定された対象児の人数から項目ごとの通過率を検討したところ以下のことが明らかになった。

図1は、運動・感覚分野の身体意識項目56項目について、対象児の1人目が可能になる月齢から20%の対象児が可能になる月齢、80%の対象児が可能になる月齢、100%の対象児が可能になる月齢を帯状に示したものである。

運動・感覚分野の身体意識項目56項目中「M-2：手を出す。さぐる」₁、「M-3：両手を近づけてふれたりつかんだりする」₁、「M-4：おもちゃ(ガラガラなど)をつかみ口に持っていく」₁、「P-4：長座位をとらせると手を前につき、ひとりで座っている」₁、「Lo-4：あおむきから腹ばいにねられる」などの14項目は、6ヵ月以内で全対象児が達成することができた項目である。これらの項目は、生後0ヵ月から18ヵ月までに獲得する運動機能の項目に集中していた。

「P-7：正座できる」₁、「M-8：出された2つのものを同時に持てる」₁、「P-6：座らせ1片腕を横に引く(押す)と体が平衡を保つように動く」₁、「Lo-9：人につかまって歩く」₁、「Lo-10：階段をはい上がる」などの14項目は、7ヶ月から12ヶ月の期間で全対象児が達成できた項目である。「-20：直線の上を踏みはずさないで歩ける(幅10cm)」や「Lo-9：人につかまって歩く」など、動的バランスを維持するなど身体のバランスに関わる項目が多かった。

「P-15：立ったままでぐるっとまわる」₁、「P-17：階段の一番下からとびおる」₁、「Lo-15：両足でぴよんぴよんとぶ」₁、「Lo-18：横ころがりができる」₁、「M-13：スプーンをひっくり返さないで口のところへ持ってゆく」₁、「M-18：くつをはく」などの20項目は、13ヵ月から18ヵ月の期間で全対象児が通過する項目であることがわかった。これらの項目は、平均台歩きや姿勢の模倣、経験したことを描くなど、空間におけるバランス能力やイメージする力、創造性など知的な能力に依存する項目が多かった。

以上、6ヶ月以内で全対象児が通過する項目と、7ヶ月から12ヶ月の間で全対象児が通過する項目、13ヶ月から18ヵ月の間で全対象児が通過する項目をあわせると、運動・感覚分野の身体意識に関わる56項目中48項目(85%)が、18ヶ月の期間で全対象児が通過する項目であることが示された。

「P-18：階段を2段目からとびおる」₁、「M-22：はずむボールをつかまえる」₁、「Lo-22：スキップができる」₁、「P-26：同じ姿勢がとれる(片手で反対側の耳をおさえ

る)」₁、「M-26：自分でおしりをふくことができる」の5項目は、19ヵ月から24ヵ月の間で全対象児が通過する項目だった。

「P-16：開眼片足立ちが一瞬できる」₁、「Lo-16：つま先で歩く」₁、「M-21：三輪車をこぐことができる」の3項目は、全対象児が可能になるまで25ヵ月以上かかる項目であった。

図2は、言語・社会性分野における身体意識能力に関わる53項目について、対象児の1人目が可能になる月齢から20%の対象児が可能になる月齢、80%の対象児が可能になる月齢、100%の対象児が可能になる月齢を帯状に示したものである。

言語分野の身体意識項目36項目中、8%にあたる「L-4：注意を向けてじっと見る」₁、「Le-1：きげんのよい時は、アーウーエー(喉音)の声を出す」₁、「Le-2：自ら声を出して笑う」の3項目は、6ヵ月以内で全対象児が達成することができた項目である。また、「L-6：『ちようだい』と言って身振りで示すと反応する」₁、「L-5：自分の名前を呼ばれると反応する」など7項目は、7ヵ月から12ヵ月の間で全対象児が達成できた。

「Le-5：舌をならすことなどをくり返す」₁、「Le-10：大人の言った単語をそのまま、まねすることが多くなる」₁、「Le-11：おしっこをしたくなると、どうにか教える」などの11項目は、13ヵ月から18ヵ月の間で全対象児が達成することができた項目である。

「Le-15：自分のことを愛称を使って表現できる」₁、「L-13：目・耳・口・手口足・鼻を指すことができる」₁、「Le-18：赤・黄・青が言える」₁、「L-17：長い、短いがわかる」₁、「L-25：3種類の動作を命令されると実行できる」₁、「Le-26：『5,2,4,9』『7,3,2,8』の数詞の復唱ができる」₁、「Le-27：ひら仮名で書かれた自分の名前が読める」などの項目は、19ヵ月から24ヵ月の間で全対象児が達成することができた項目である。

「L-16：大きい、小さいがわかる」₁、「L-18：赤・黄・青がわかる」₁、「L-15：髪・口・歯・舌(ベ口)・へそ・つめを指すことができる」₁、「Le-14：『パパおしごといった』などの3語文を話す」₁、「Le-20：代名詞(ぼくに、ぼくのものなど)を使う」₁、「Le-19：歩く動作にあわせて1,2,3……10までの数が言える」₁、「Le-22：両親の姓名が言える」の7項目は、全対象児が達成するのに25ヵ月以上かかる項目で、いずれも36ヵ月から48ヵ月を境に達成できるようになる項目であった。

社会性分野の身体意識項目17項目中「S-1：あやすとほほえむ」₁、「S-2：顔をじっと見る」₁、「S-4：鏡の中の自分の像を見て反応する」の3項目は、6ヵ月以内で全対象児が達成することができた。

「S-6：『バイバイ』『ニギニギ』『おつむテンテン』の身振りを模倣する」₁、「S-7：着衣に応ずる」₁、「S-9：子どものまわりで遊ぶ」などの6項目は、7ヵ月から12ヵ月の間で

全対象児が達成することができた。

「S-5：人見知りする」、「S-19：ボール遊びの順番を待つことができる」、「S-23：経験したことを、他の子に話す」などの6項目は、13ヵ月から18ヵ月の期間で全対象児が達成することができた項目である。

社会性分野の身体意識に関連する17項目のうち15項目は、12ヶ月18ヵ月までの期間で全対象児が可能になることが明らかになった。しかし、「S-16：親から離れて遊ぶ」、「S-18：ままごとの役を演じることができる」の2項目は、1人目の対象児が可能になった月齢から全対象児が可能になる月齢までが25ヵ月以上という長い期間を必要とする項目であった。

以上の結果から、心身の正常発達の基盤となる身体意識能力が5ヶ月から72ヶ月の期間でどのように獲得されていくのか、その通過率が明らかになった。身体意識に関わる様々なスキルの獲得について、図1、図2のように示したことで支援の適時性と同時に支援の必要な期間が明らかになった。

(2) ムーブメント教育による発達支援の実際

前述した身体意識発達に関わるアセスメントを活用して、ムーブメント教育による支援を展開した。また、教室における遊具環境と活用の実際についてプログラムを元に分析を行い、障害乳幼児の身体意識を促す動的活動には、どのような環境が必要かについて明らかにした。

教室における動的環境は、Aグループでは、キャスターハンモック・トランポリン・エアートランポリン・スクーターボードなどの揺れを中心とした感覚運動遊具を中心とした環境構成であった。またBグループでは、プレイバンド・フープ・スカーフ・風船・チャイルドベンチ・ロープ・カラートンネル・大型絵カードなどの知覚運動遊具による環境構成であった。

これらの遊具による動的な環境により、子どもの自発的な動きを引き出され、環境との相互作用が活性化し、発達を促す良循環が生まれることが示された。

さらに、家族参加型支援の視点からムーブメント教育による実践の有効性を明らかにするために、参加した保護者（母親）へのインタビューを行った。

教室に参加した保護者20名のインタビューから以下のことが明らかになった。

子どもに対する関わり方や思いの変化

- 変わった・・・15名
- 少し変わった・・・5名
- あまり変わらない・・・0名

【その理由(どのようなところが)】

- ・遊びの幅が広がった。
- ・自宅でもムーブメントを取り入れている。
- ・家でも色々な遊びが出来ることを知った。

- ・好きなことを伸ばしてあげようと思うようになった
- ・遊び方や接し方を勉強させていただいた
- ・子どもの実顔が増えた
- ・ダウン症だけでなく、いろんな障害のお子さんの実顔を見てどんな形であれ、楽しく元気でいてくれるのが 番だと思うようになった。
- ・トランポリンやバルーンなどの揺れが好きと分かり家でも取り入れようと思う。
- ・この子なりに親が思っているより発達しているし、成長してくれそうだと思うようになった。
- ・なるべく体を起こすようにとか、刺激を与えるように心掛けるようになった。
- ・サーキットの活動は大好きで最初から楽しく参加できたのでうれしかった。
- ・自宅以外での我が子が、他の子との関わり方や興味を示す内容などを知る機会となり、今後の対応や療育の参考になった。
- ・年中から年長になり、大きく体を動かして少しスリルを感じながらも楽しむことにチャレンジ精神を持って取り組みたり、自ら遊んだり出来るようになった。
- ・少しでもいいから、「みんなと同じようにやってもらいたい、させなければ」という思いがなくなった。楽しめること精一杯楽しんで、出来ることが少しずつ増えていけばいいと思えるようになった。
- ・自分も 一緒に成長できたらいいと思う。
- ・みんなと同じことをさせることが 番重要なことではなく、本人のやる気を尊重することが大事と思うようになった。
- ・好きなことになると一生懸命でやめられなくなるが、回りの様子は見ているようだ。
- ・優しく接することが出来るようになった。
- ・焦らず見守ることが出来るようになり。いま出来なくてもいつかは出来ると思えるようになった。
- ・たくさんの経験をさせてあげたいと思う。
- ・無理に参加させようとする逆効果になることがわかった。
- ・手をかけすぎのも良くないと思った。
- ・参加する前は、子どもの悪いところだけしか見られていなかった。参加してから、少しずつだが子どものいいところが見られるようになった(多動と捉えていたことが「元気、走るのが速い」というように)。

保護者自身の考え方の変化

- 変わった・・・15名
- 少し変わった・・・4名
- 余り変わらない・・・1名

【その理由(どのようなところが)】

- ・市販されているおもちゃだけでなく、手作りでおもちゃが出来ることを実際に見せてもらい参考になった。
- ・いろいろと不安だらけだったが、楽しく過ごせるようになった。

- ・子どもが集中できずにいるんな所(目につくところ)に行っていたのを否定的に思っていたが、それも今は大切なことだと思えるようになった。
- ・子ども達の実顔を見るようになって、「出来る、出来ない」ではなく、体を使って楽しむことが 一番大事なんだということがわかった。
- ・目・耳・手足など、視覚、聴覚、触覚に働きかけることで心など内面も変わっていく(育っていく)ことがわかった。
- ・楽しいことをもっともっとやらせてあげようと思うようになった。
- ・親は出来ないかも思っていたことが、本人が自分の力で乗り越えられることに気づかせてもらった。
- ・「好きなことをとことんさせる」という考えに共感した。
- ・教室で受けるアドバイスの内容に領ける点が多々あり、日々、戸惑いながら関わっていたことも思いが晴れたように思った。あたまとこころとからだを同時に使ってこれからも成長してほしいと祈っている。
- ・子どもは興味があること、楽しいと思う気持ちからやる気が出て、それが学びにつながるのだとわかった。楽しく進んでみんなと関わることが大事だと思った。
- ・どうしても言語をと思ってしまったが、言語も運動することにより育つことを学んだ。五感をふるに使い、感じることの大切さを学び、普段から気をつけて教えてあげることが出来るようになった。
- ・障害児への関わり方を根本的に考えるようになり、障害児教育に関心を持った。
- ・おらかな気持ちで子どもと向き合えるようになった。
- ・周りを見て出来ないことにイライラしないでのんびりとゆったりした気持ちで子どもを見られるようになった。

以上の結果から、ムーブメント教育による支援を通して、母親の子どもに対する関わり方や思い、自身の考え方にポジティブな変化が認められることがわかった。これにより、家族参加型支援の有効性が示唆されたと考える。

《参考文献》

小林芳文：MEPA-R, ムーブメント教育・療法プログラムアセスメント, 日本文化科学社, 2005.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 飯村敦子・小林芳文：障害乳幼児と家族への支援に活かすムーブメント教育の実践分析に関する研究, 保育科学研究, 査読無, 第2巻, 2012, 116-120.
2. 飯村敦子・小林芳文：障害のある子どもの生きやすさを支える支援に関する研究, 保育科学研究, 査読無, 第3巻, 日本保育協

会, 2013, 75-98.

〔学会発表〕(計9件)

1. 飯村敦子・小林芳文：重度重複障害児(者)のムーブメント教育・療法プログラムアセスメント改定版の開発, 日本特殊教育学会, 第49回大会, 2011年9月24日, 弘前大学.
2. 飯村敦子・小林保子・阿部美穂子・新井良保・藤村元邦・小林芳文：ムーブメント教育・療法による重度・重複障害児(者)の支援, 日本特殊教育学会, 第49回大会(自主シンポジウム), 2011年9月25日, 弘前大学.
3. 安部珠央・飯村敦子：幼児の創造性を育むムーブメント教育に関する実証的研究, 日本児童学会, 2012年3月3日, 和光大学.
4. 佐藤麻美・飯村敦子：子育て支援におけるムーブメント教育の活用とその意義, 日本発達心理学会, 第23回大会, 2012年3月11日, 名古屋国際会議場.
5. 飯村敦子・小林芳文：ムーブメント教育による障害のある子どもの支援, 日本特殊教育学会, 第50回大会, 2012年9月28日, 筑波大学(つくば国際会議場).
6. 飯村敦子・小林芳文：障害乳幼児と家族への支援に活かすムーブメント教育の実践分析に関する研究, 日本保育協会保育科学研究所, 第2回学術研究集会, 2012年9月29日, 日本保育協会.
7. 佐藤麻美・飯村敦子：子育て支援へのムーブメント教育の活用, 日本発達心理学会, 第24回大会, 2013年3月15日, 明治学院大学.
8. 小林芳文・飯村敦子：アセスメントからプログラムへ, 日本児童学会ムーブメント教育・療法学術集会, 2013年12月22日, 富山大学.
9. 佐藤麻美・飯村敦子：子育て支援へのムーブメント教育の継続的活用, 日本発達心理学会, 第25回大会, 2014年3月21日, 京都大学.

〔図書〕(計3件)

1. 小林芳文・藤村元邦・飯村敦子：重症児(者)・重度重複障がい児のムーブメント教育療法プログラムアセスメント(MEPA-R), 文教資料協会, 2014, 29頁.
2. 小林芳文・藤村元邦・飯村敦子・新井良保・當島茂登・大橋さつき：障害の重い児(者)が求めるムーブメント教育・療法プログラム-MEPA-Rの実施と活用の手引-, 文教資料協会, 2014, 215頁.
3. 小林芳文・大橋さつき・飯村敦子：発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育, 2014, 大修館書店, 215頁.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯村敦子 (IIMURA ATSUKO)
鎌倉女子大学・児童学部・教授
研究者番号：70326982

(2) 研究分担者

小林 芳文 (KOBAYASHI YOSHIFUMI)
和光大学・現代人間学部
研究者番号：70106152

(4) 研究協力者

竹内 麗子 (TAKEUTI REIKO)
清水台保育園(福井県)・園長
山崎 奏名子 (YAMAZAKI KANAKO)
鎌倉女子大学大学院児童学研究科・学生

(3) 連携研究者

なし

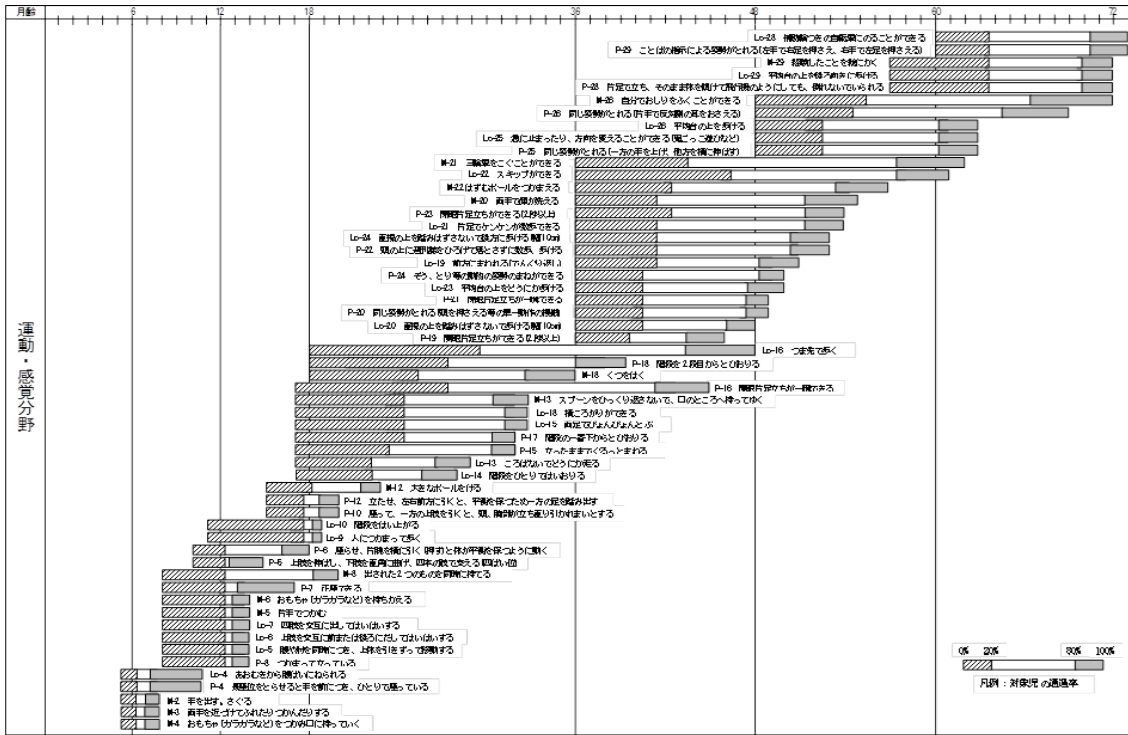


図1：運動・感覚分野の発達目標項目と達成月齢期間

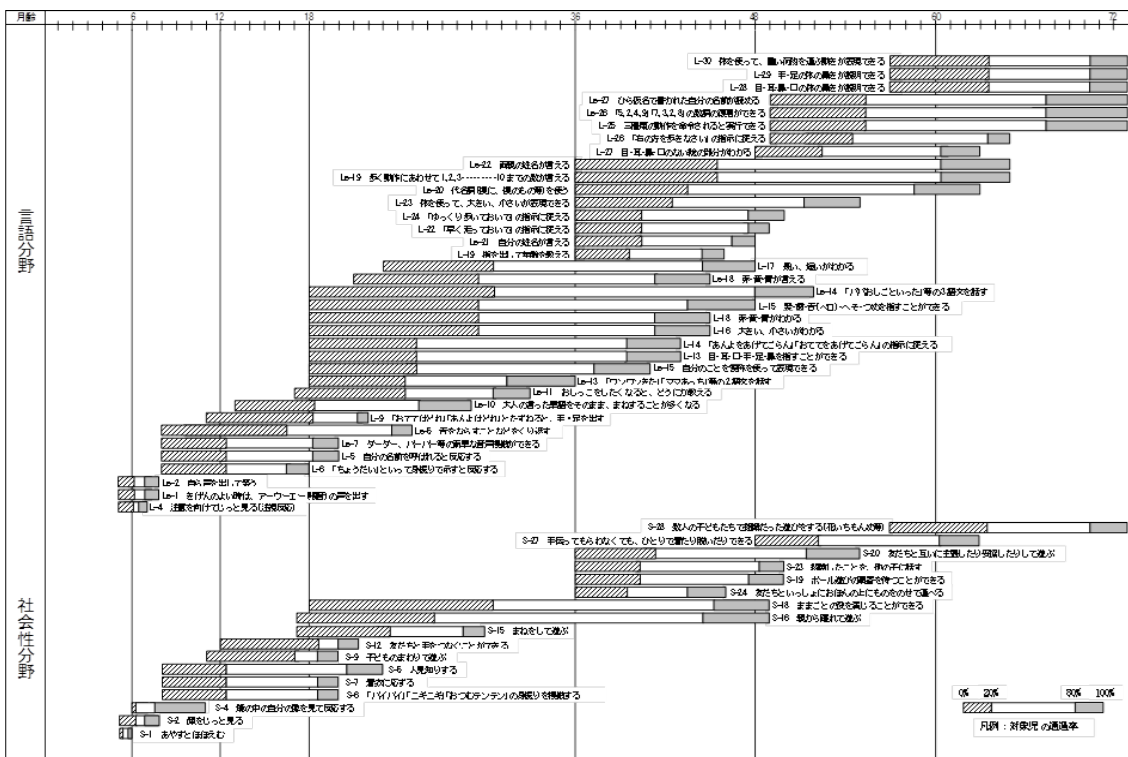


図2：言語・社会性分野の発達目標項目と達成月齢期間